

「戦争と平和！」

第2回

沈黙の代償

西脇 英夫

昭和19年国民学校4年の春に、名古屋から南へ2時間のどかな知多半島の海辺へ一家で疎開しました。間もなく担任が応召して去り、女性の先生に代わりました。毎日の軍事訓練では、学校へ配属の軍人がやたらと威張っていました。ひよわな都会っ子でしたが加藤隼戦闘機隊長、西住戦車隊長に憧れ、50歳だった父に「どうしてお国のために戦争に行かないの？」と尋ねる軍国少年でした。



西脇氏 3歳
お兄様 5歳

三重県の軍港・四日市が空襲で夜空を焦がして燃える様子を伊勢湾越しに対岸から見ました。航空機の製造工場が多かった名古屋は何度も空襲があり、我が家にも焼け出された人が何家族も住み着いていたそうですが、終戦の2か月前、B29による爆撃でピカピカに柱を磨いていた生家も

名古屋城もまる焼け。

10歳で終戦、食糧難・インフレの激動の戦後生活を親の苦勞も知らずに”我は海の子”で過ごしました。従兄らが中国戦線から帰国の挨拶に来て、父と戦争の話をしているのを聞きました。村を襲い床下に隠された食糧の収奪、数珠つなぎの匪賊に見せしめなど、憧れた皇軍とは真逆の姿…。支那人（当時は”チャンコロ”と蔑んでいました）を鞭打ち軍務にコキ使っていた話も。「カイカイデー」（中国語で”急げ”の意味）の語をまだ覚えています。

東京軍事裁判の新聞記事を読み聞かせてくれた母はガンで中1の夏に他界。中3の時に湯川秀樹博士のノーベル賞受賞講演を焼け残った市立講堂で聴きました。よく理解できませんでしたが後年、原水禁運動に熱心だった博士の温厚な語り口が印象的で、不遜にも、あんな科学者になりたいと思いました。

ノンポリの大学生活から公務員試験を経て科技厅に。航空宇宙技術研究所（現 JAXA）でジェットエンジンの研究に従事し、40歳のとき400

名近い研究職員の組合結成に呼応、「研究の民主・公開」、「軍事研究に非加担」、「天下り反対」を訴え、第1期の書記長に。やがて日本科学者会議の委員も。当時は防衛庁も制服も白眼視する風潮があり、軍需産業に携わる企業の研究者は学会でも小さくなっていました。今日、膨くれつつある軍事委託研究予算に群がる官民の研究機関に今昔の感を覚えます。湯川博士の教えは風化してしまったのでしょうか。

直行便がなかった30年前には、宮古島トライアスロン大会に出場の際に那覇空港で乗り継ぎでしたので、沖縄各地で戦争の悲惨さと内地人（ヤマトンチュー）の横暴さを見聞しました。海軍壕では、「沖縄県民かく戦えり、後世、沖縄県民に格別の配慮を」と本国に最後の打電のあと自決した大田海軍司令官のことを知り涙しました。オスプレイの危険性など沖縄基地問題に心を痛めています。

以下に私の思いを

- 戦争の原因。民族間・宗教対立。経済の締め付け。領土（資源）の争奪…。周囲の雰囲気にあおられズルズル泥沼にではなく、戦争の費用対効果を冷静に分析しよう。「孫子の兵法」は、開戦の前にグランドデザインを描けと言っています。
- 戦費と災害。膨大な軍事費と犠牲の大きさを考えよう。（国家予算に占める日本の軍事費の割合は1944年85.5%、2017年5.3%。また、第2次大戦の戦争犠牲者はソ連2000万人、中国1000万人、日本310万人です）
- 戦争・紛争の陰に、それで儲ける仕掛け人がいることに気づこう。

人間の叡智とは、「過去の教訓を生かす」ではないでしょうか。付和雷同・沈黙の代償はあまりにも悲惨です。

抜本策は、国連の安保理、国際司法裁判所の権限強化です。各国とも軍事予算の大半を国連に供託し、平和維持・監視活動を強化すれば、やがて各国の軍事費はゼロに。そして福祉、医療、教育は充実し

「地球惑星は平和な樂園に」

Yes, we can !